# 全国同人雑誌評　和田伸一郎

今年から、全国同人雑誌協会の同人雑誌評の一翼を担うことになった。私は一五年間、群馬県高校生文学賞散文部門（主に小説）の選考委員を務めてきた。その間、全国高校文芸コンクールの小説部門の審査員も四年間担当した。年間約七〇篇、兼務している期間は、一二〇篇の高校生の書いた小説を読んできた。したがって会社に在職していた時期は、送られてきた同人誌は、必要に迫られたものしか読まなかった。

退職した今、積読（つんどく）状態の同人誌にツケを払う時が来たと思った。それに考えてみれば、高校生の小説の読書体験を蓄積している私が、六十代以上の書き手がほとんどの同人誌の批評を担当するのも一興ではないかと思う。

今回『文芸思潮』に送られてきた、三〇誌と私の手元にある一〇誌を小説（連載小説を除く）中心に読んでいった。印象深い順に紹介する。

**●「詩と真実」862号（熊本県）**

**「剝奪」（出　町子）** 主人公ルイは、結婚して二年経つ共働き夫婦。夕飯の支度をしながら、朝のための牛乳がないのに気づき、近所のコンビニに行く。そこで独身時代立ち読みしていた週刊誌が目にとまり、手に取って開いてみる。その巻頭のグラビアの写真に魅了され「思わずそのページを一枚破ってしまった」それからルイはそのスリリングな行為を繰り返す。エモノは、ちぎって小箱にしまっておいた。ある日夫が、「中に何が入っているのだ」と聞いてきた。「なんでもないの」と笑ってごまかした。

「中のものは自分がコンビニから盗んできたものだと言ったら、どんな顔をしたろうと考えた。その感じが悪くはないのだ。夫の知らない秘密が心地いいのだった。」こうして徐々に精神が壊れていくさまが描かれた不気味な小説だ。ルイの空虚感を埋める行為が、現代社会の危うさを警鐘しているようでもある。

**●「季刊作家」95号（愛知県）**

**「母なるりんご」（津田一孝）** 主人公「私」の母は、戸籍上祖母で、祖母の娘が出産直後に亡くなったため、祖母に育てられたと聞いている。父については何も聞かされず、そのことに触れることはタブーのようだと子どもながらに感じてきた。「母が父親について話してくれないのは、話すことができないような人、例えば凶悪な犯罪者だからだろうか」という不安に「私」はさいなまれた。

「息子のためなら自分はどうなっても構わない」といった母だった。母が入院している病院から母危篤のファックスが職場に送られてきて、母の故郷にある病院を訪ねていく。しかし、母はすでに亡くなっていた。そこで会った人々から自らの出生の秘密を探り出す。ミステリーのような展開で、事実が明らかになっていく。





**●「あるかいど」70号（大阪府）**

**「卵を抱えて」（高原あふち）** 結婚して五年過ぎた三四歳の「私」の不妊治療のことが事細かに描いてあり、その辺の事情に疎い私は啓蒙された。夫のことを「津雲さん」と呼び、診察券には「緒方奈央」とあるので、夫婦別姓なのか？　そこには触れられていない。不妊治療を始めた「私」に対し、姑は「仕事のつもりで通ってな」とプレッシャーをかける。「勝手なことを言うんじゃないよ、ここに通うために仕事を休み、迷惑をかける上に給料だって減るんだ。おまけに保険が適用されず、医療費の出費だってバカにならない」と心の中で反発する。不妊の妻への心理的圧迫と偏見を克服していく過程が描かれている。

**●「クレーン」42号（群馬県）**

**「バンドリの毛皮帽子―サハリン断章」（中山茅集子）** 主人公アカリ（一〇歳）の視点で、一九三六年のサハリン（当時日本領樺太）が描かれている。世相は二・二六事件、阿部定事件が起こった年である。少女の目に映った新興宗教団体の内部の様子やその弾圧、そしてサハリンでの厳しい自然と牧歌的な暮らしが、少女のみずみずしい感性によって、時を超えて当時に舞い降りたような印象を与えてくれる。

**●「季刊午前」58号（福岡県）**

**「手袋とサボテン」（西田宣子）** 揺れるものに拒否反応を起こす「私」は、「飛行機に乗れない。船旅なんてまっぴら。バスもだめ。エスカレーターは避けて階段を上る。」

「私」は、五歳の時に母を亡くし、小学四年の時、父を交通事故で亡くした。その後「伯母夫婦に引きとられた。それからは伯母夫婦を父と母、従兄の光一を兄と呼んで生きてきた」現在は教員をしている兄との二人暮らし。その兄に恋人がいることを知り、動揺し混乱する。「この先、兄のいない部屋で私はどんなふうに暮らしていけばいいのか。」そうして立ち直るまでの心理が描いてある。途中、井上靖の詩の引用はいらないと思う。

**●「街道」38号（東京都）**

**「公園から見える夕日」（木下径子）** わずか3ページの掌篇小説だが、適格な描写と無駄のない文章で、老いらくの恋がさわやかに描かれている。晩秋の公園を散歩する二人。杖を突いて歩く諒子は、バンパスグラスという「真っ白でのびやかな房をたっぷりとそよがせた、遠くからも目に付く植物」が気に入り、「その白い大きな植物に抱きついて風に揺られたい」と思う。

「目の前の広い公園と白い大きなバンパスグラスの見えるベンチに腰掛けて、夕暮れの曇り空をゆったりと眺めていた。

隣に柚木が座っている。二人で人気の少ない公園に落ち着いて座るのはめったにないことで、ゆったりと顔を見合わせていた」

全国同人雑誌協会

もはや二人の関係は説明不要である。

●**「ガランス」28号（福岡県）**

**「風の行方」（由比和子）** 主人公麻子は五歳で養女に入った。「一人で育て上げた息子」が結婚して半年後、養親を四五年ぶりに訪ねていく。近所の老女に五年前義父は他界し、義母は入院していると聞く。洗濯物を病院に届けてくれと頼まれる。

学生時代、友人に「私、義母さんが五歳で亡くした子どもの代わりだったのよ。ずっと代わりだと苦しんできた」と心の内をぶちまけた。

「義母は突然現れた麻子に対し驚き、大きゅうなってと場違いな言葉を発したものの、始終冷静であった。短大を出て就職して、一度も帰らず、実質、家出した麻子をとがめたりしなかった。むしろ思いがけない再会を喜んでいた」そのまま義母の世話を続け、幼なじみやかつての同級生の出現によって、鬱屈していたものが徐々に解放へと向かっていく。ただ説明的な文章が目に付くので、最小限に抑えたほうがいい。

●**「ふくやま文学」33号（広島県）**

**「すき間・トリップ」（花岡順子）** 乳がんの定期検査の描写から始まる。五十代半ばの小城由香莉は医師から「左の胸に薄く影があるんですよね」といわれる。高校の時の同級生と一緒に受け、受信後、温泉付きのリゾートホテルに行き、そこで温泉に入ってランチを食べる予定だ。そこで接待ゴルフで来ている二人の営業マンと知りあい、由香莉が坂道で転ぶと助け起こし、気遣ってくれた。

「夫の友広にも、息子たちにも気づかいなど何年もされたことなどない。なんなら、由香莉をお金のかからない家政婦くらいに思っているんじゃないかと思ってしまうことすらある。しかし、別だん、イヤだとか悲しいとか思っていない自分がいる。めんどくさく考えることがめんどうになっている」これは現代社会の一つの象徴としての言葉になっている。

作者は、軽妙な会話と描写が持ち味なのだが、結末の八行では男たちとの情事が暗示されるが、これは一挙に通俗化してしまうので、入れないほうがよい。

●**「あべの文学」30号（兵庫県）**

**「鉄塔の下」（高　琢基）** 中学2年生田中浩の視点で朝鮮人の級友金村との友情が描かれている。年代は明らかではないが、一九五〇年代後半ではないかと思う。当時の朝鮮人の集落は、貧しさゆえ、あからさまな差別を受けていた。金村の家にどぶろくを買いに行った母に、金村の父は死んだと聞かされる。「ともかく南方で爆撃受けて右腕飛んで、耳も聞こえんようになってな、左手一本でリヤカー引いてクズ屋しとったけど、酒の飲みすぎで肝硬変で死んだって。酒飲むと、日本人として兵隊行ってるのになんで障害年金





くれへんのや、戦争まだ終わってない、言うのが口癖やと奥さん言うとった」

金村の不審の行動について級友にきくと「なに金村が瓦めくって何か取ってるって、絶対スズメのヒナや。あいつ、それ売って金儲けしてるらしいで」浩はかつてスズメを飼ったことがあり、ヒナを見せてくれと頼み、金村の自宅に行く。一匹二〇〇円や。けどお前やったら一五〇円、いや百円でええわ」

「なに言うてんのん、あげてやり」隣の部屋で病気で寝ている金村の母が言う。

「僕、もう帰るわ。絶対買うから一匹は置いとってよ」

こうした純な少年の目を通じて当時の風俗が描かれている。

●**「港の灯」13号（兵庫県）**

次は、ほっこりしたユーモアが漂う作品を二篇紹介する。

**「道楽」（加崎希和）** は、「終戦間際に他界した囲碁好きだった父」の思い出から始まる。

「私」が小学三年生くらいの時、人力車で妾のところに行こうとする父に甘えて無理やり乗り込む。

「父は女の人をベニタマと呼んだ。」

「お父さん、ここ、お茶屋さん？　置屋さん？」

「元々、父が初代・草起派・小唄の家元なのだ。お稽古の時間が来ても帰ってこない父に代わり、弟子に伯母が代稽古を就けているうちに、家元の座は伯母になり、父は大師匠と呼ばれ、自由な身が気楽でいいと安穏としている。」

「あのぉ……、ベ・ニ・タ・マさんは、父のお弟子さんですか？」

「ベ・ニ・タ・マさんも、父の碁のお相手をなさるんですか」聞くたびにベニタマは「ホ、ホ、ホ」と笑い、父は「おおそうだ」と繰り返す。現在とは対極的なのどかな世界が心地よい。

**「コロナの時代」（堀井邦子）** タイトル通り、コロナウイルス禍での生活を描いている。「この際、家に居ようの模範生」となり、ネットフリックスに加入し、韓国ドラマ「愛の不時着」にはまっていく。

「観る時間を生み出すことに今、全頭脳を使っている気がする。部屋に一人で住んでいるわけではない。せつない溢れんばかりの愛のドラマは独りで観るに限る」こうして、朝、夫と顔を合わすと「今日の予定は？」と聞き、夫のいる時間に買い物に行き、家事を手早くこなす。

「これからスリリングな愛の駆け引きが始まるその瞬間だったのに「ただいま」と靴を脱ぐ気配を感じ、慌てて停止ボタンを押したのだった。いいとこなのにと、舌打ちもしたはずだ。そんな気配を察してか、「あっ、そのままでいいよ。観続けて気にしないで」と、物分かりのいい顔をする。とんでもない。独りで観るからこそ妄想にどっぷりと浸かり、締め付けられるような心情に涙し、感情移入でき

るのに、相手の存在を意識すると、鼻をかみながら泣くことも出来ない。気が散り集中できない。分かっていないな、とかなり不快な顔で見上げた気がする。」

「かつぎこまれたベッドで呼吸器をつけたままの瀕死の姿が涙を誘う。蒼白の横顔が整いすぎて、美しすぎて、ただ魅入るだけ。気づいたら息を止めていた。胸が苦しいのはこのせいか。手にしたお茶も冷え、思わず叫んでしまった。（死なないで）」

こうした場面で、読んでいて思わず笑ってしまった。時にはこのような楽しい小説もいいものだ。ただ、こういう軽い感じの小説は、あまり漢字は多用せず、ひらがなを多用して、見た目もやわらかい印象を与えたほうがよい。

**●「てくる」27号（滋賀県）**

**「わけあって飼うことになりました」（耽羅沢　楮）**

二〇〇九年頃のデパートの婦人服売り場の課長の奮闘記である。不況で売り上げが低迷している中、犬との出会いによって、アイデアが浮かび、その案が採用され、ヒットして部長になる。しかし、時代はファストファッションやWeb通販が進出し、脅威になってきた。営業本部から来たMD推進部長と意見が対立し、早期退職に応募した。現在はアパレル倉庫で検品のアルバイトをしている。趣味で水彩画を始めて奇妙な犬と出会う。この二匹目のエピソードはいらなかったのではないか。

最後にいろいろ考えさせられたエッセイと講演録を紹介する。

**●「架橋」34号（愛知県）**

**「24歳を迎え、私が今考えていること」（朴成柱（パクソンチュ））**

「私は京都生まれ、韓国・ソウル育ちの〈在日〉三世である。日本で生まれ育つ一般的な〈在日〉とは少し違う経緯の持ち主といえるだろう。」

「一九九〇年代前半までは、韓国人が日本に行くためには、徹底的な反共教育を受けなければならなかった。」

「当時は、朝鮮籍の在日朝鮮人と韓国人の婚姻関係は法律上認められなかった」ため、「私」の両親は婚姻関係を結んだ夫婦ではなかった。

「今でも在日朝鮮人は『北のスパイ』と勘違いされたりする」といった記述に意外な気がした。私は民主化によって韓国はもっと規制の緩い国になっていると思っていた。

「私」は家の事情から七歳から約一五年間は韓国で暮らした。「父は朝鮮籍であるがゆえに年に一回しか韓国に来られなかった」小学生の時に同級生から「パンチョッパリ（半日本人という意味で、在日朝鮮人に対する差別用語）」と言われていじめられた。

「幼い頃の私は韓国語が出来なかったため、新しい単語を聞く度に、母にその意味を聞く癖があった。母はいつも優しく説明してくれた。「パンチョッパリ」を初めて耳にした際も、いつものように聞いてみた。そうすると、いつもとは違い、何も言わないで急に私を抱きしめたのだった。」

そして次のように結んでいる。

「私は、『自分が何者か』に囚われずに生きていきたいと思っている。それが24歳となった私がいま考えていることである。」

**●「追伸」10号（愛知県）**

**〈講演録〉「失われた命のために行動するということ―名古屋入管スリランカ人女性死亡事件と私」（平田雅己）**「今年（二〇二一年）三月六日、名古屋市港区にある名古屋入管の収容施設内で、スリランカ国籍の三三歳の女性ウィシュマ・サンダマリさんが亡くなりました。私は三ヵ月後の六月三日、名古屋地方検察庁に対し名古屋入管関係者の刑事責任を求める告発状を郵送し受理されました。」

「肩書も組織も一切関係ありません。自分の生活圏で発生した悲劇に心を痛め、一人の人間として何ができるのか、思慮した上での単独行動でした。」

「私は基本的に根っからのめんどくさがりやで、まして人を訴えるなんて逆恨みされるかもしれないリスクをわざわざ負うなんてことはありえないそんな人間です。

刑事告発は有権者であれば誰でもできます。私は今回告発を書面にしましたが、口頭でもいいですし、弁護士のサポートも必須ではありません。本当は私でなく他の誰かにやってほしかった。」

彼女が亡くなる約一カ月前に英語と日本語の両方で書かれた手紙。

「マノさんへ、私はぜんぜん大丈夫じゃないです。この二週間、大丈夫じゃないです。食べることも飲むことも出来ません。ぜんぶ体がしびれている。職員たちはストレスだといいます。彼らは私を病院につれていこうとしません。私は彼らに監禁されているからです。私は回復したい。でもどうやって？　わかりません。どうか回復するために助けてください。私は食べなきゃいけないのに食べられない。すべての食べ物や水も吐いてしまう。どうしていいかわからない。いますぐに私を助けてください。私はあなたに迷惑をかけたくない。でも、私は大丈夫じゃない。あなたに話すこともためらったけど、あなた以外に私の世話をしてくれるひとはいないから。　ウィシュマより」

理不尽なことを見聞きしたら声を上げなければいけない。なぜなら次には、私たちが理不尽な目にあわされることになるのだから。ここでは個人でも闘えることを教えてくれている。

「世界中のすべての権利＝法は闘い取られたものである。重要な法命題はすべて、まずこれに逆らうものから闘い取らねばならなかった。また、あらゆる権利＝法は、国民の

それも個人のそれも、いつでもそれを貫く用意があるということを前提としている。権利＝法は、単なる思想ではなく、生き生きとした力なのである。」（イェーリング著『権利のための闘争』村上淳一訳／岩波文庫より）

今回の優秀作

**「剥奪」出　町子**「詩と真実」862号

**「母なるりんご」津田一孝**「季刊作家」95号

**「卵を抱えて」高原あふち**「あるかいど」70号

**「バンドリの毛皮帽子―サハリン断章」中山茅集子**「クレーン」42号

準優秀作

「手袋とサボテン」西田宣子「季刊午前」58号

「公園から見える夕日」木下径子「街道」38号

「風の行方」由比和子「ガランス」28号

「すき間・トリップ」花岡順子「ふくやま文学」33号

**同人雑誌最優秀作品「まほろば賞」への推薦のお願い**

第16回「まほろば賞」への同人雑誌優秀作品の御推薦をお願いします。4月30日までに、全国同人雑誌協会「まほろば賞推薦係」まで、郵送かメールで①作品タイトル②著者名③掲載同人雑誌および号数④推薦者をお知らせください。お待ちしております。

**全国同人雑誌協会**

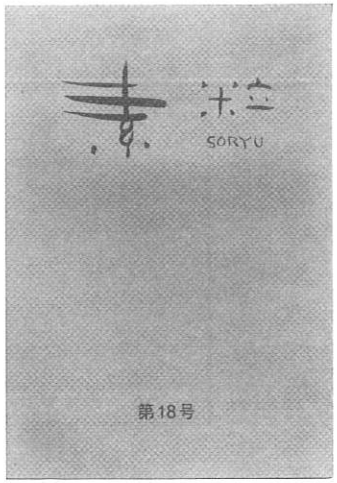
全国同人雑誌協会〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13　E-mail ZDK@asiawave.co.jp

# 全国同人雑誌評　五十嵐勉

**●「素粒」18号（富山県）**

この誌はしばらく見なかった気がするが、富山の同人雑誌の高いレベルをよく示している。同人は女性が多く、現代をよく捉えて、新鮮な感じがするのも、特長であろう。どの作品も、時代に対して敏感であり、しかもそれが追い求めるような捉え方でなく、自然な受容感のうちに表現されている姿勢がいい。巻頭作**「村上君と優のこと」（若栗清子）**は特にそれが顕著で、よく見れば現代として重要なテーマをさりげなく、おもしろく浮かび上がらせている手腕は、快いものがある。息子優の友達「村上君」がロシア人二世で金髪白肌の異質な存在でありながら、それを乗り越えて付き合っていく過程がたいへん明瞭にわかりやすく描かれている。子供から少年への思春期に移っていく変化も鮮やかに映し出され、その複雑な真理の中に、国境や人種を乗り越える人間同士の深まりが実現していく姿は感動を呼ぶ。特に村上君が金髪を黒髪に染めるのに対して、自分も髪を金髪に染めるその行為が、周囲をも笑いで巻き込んで偏見を打開させる叙述は説得性もあり、快哉を飛ばしたくなる爽快感がある。航空交通が発達し、日本の世界への企業進出も戦前とは比較にならず圧倒的に広がっている趨勢の中で、異人種との国際結婚も増え、東京ではどこのクラスにも外人二世は一人や二人は見られるのが普通である。黒人二世も少なくない。オリンピックやプロ野球でもそうした血を受け継いだ若者が活躍する時代になっている。こういう現代の状況に対して筆を振るう書き手が意外に少ない。その面でも、この作品はそれに応える内質を備えている。またこうした人間同士の真の交わりは、国境を超えると同時に、国家間の戦いを防ぐものにもなり戦争を抑止する力にもなる。この作品の奥底に潜む親和の力はそこまで到達している。優秀作である。

ただ、タイトルが平凡で損をしていることは付言しておきたい。タイトルに例えば「村上ミハイル君と優」というふうに内容を表す言葉を少し入れると、読み手ももっと増えるのではないか。また最後の騎馬戦も村上君を活躍させて出色だが、そのあと生まれる仲間との融和も書き足せばさらによいフィナーレとなっただろう。



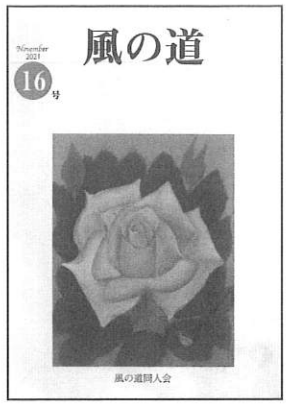

**「場合」（萌木恵）**はコロナ禍での鬱屈生活がよく書かれていて、介護ロボットも生き生きと可愛らしく描かれ、現代の一面を活写している点は評価されるが、最後飲み屋で隣同士でのグループ合コンによってうまく恋人ゲットというオチになるのは全体を浅くしている。準優秀作。

**「三原色」（白川壮子）**も着想はいい。ボナール展で、高校時代のクラスメートのことを思い出し、彼女が高校時代市役所勤めの男と心中未遂を起こしたことが蘇ってくるストーリーだ。この作品は、「三原色」が小説のテーマにどう絡んでくるのかもわからないし、何より肝心の高校生の心中未遂にしっかり迫っていない。おもしろさを孕んだ、まだ書き始めの状態というべきだろう。

**●「風の道」16号（東京都）**

「風の道」は実力のある書き手が揃っている。どういう集団だろうか、と興味をそそられる。特に読まされたのは、連載を除いて**「愛猫抄」（大森盛和）**と**「サイクロイド」（荻野央）**である。

「愛猫抄」は子供時代の体験を淡々と語りながら、猫と人間、自分と動物の殺す現実が迫真力を持って浮かび上がってくる。動物と共存しながらの日常世界が、実は生死を左右する苛酷な刃渡の上に成立している現実を見せつけられる。その上に立っての猫飼いであり、愛猫である、生々しい迫力が




満ちている。これだけ一つのリアリズムを持って描ききる手腕に、感心した。この冷徹さによって、逆に猫や蛇たちが生き生きとし、その姿が読んだ者の中に鮮やかに残る。一種の生き物供養にもなっているところに、この作品の価値がある。ただ二つ疑問を覚えたところがある。五匹生まれた子猫のうち、四匹を写経までして川に流すのなら、どうして「猫をあげます」「もらってください」とポスターや貼り紙をして他の手段をとらなかったのか、私の家ではそうしてかなり醜い猫まですべてもらわれていったので、その点が苛酷であり、腑に落ちないこと、またそのあと、残った一匹の猫を「ふられた雄猫が食い殺しに来る」というのも解せない話に思われる。あまりそういう事実は聞かないし、この場合は四匹を捨てた筆者の行為を恐れて、手の届かないところへ一匹を隠したと見る方が自然ではないのか。しかしいずれにしても、よく書けた文章で、動物と人間の一つの姿が、胸に残る作品になっている。推薦作。

「サイクロイド」はタイトルがおもしろい。小説に行為幾何学模様の言葉を用いたのを初めて見た。それはけっして奇を衒っているのではなく、小説の内容にマッチした不思議な趣を有している。随筆風にあちらこちら人生を振り返りながら、一つの形をジグソーパズルの趣で嵌め込み、硬くならないある飄逸さを持って、障害児を育てる人生観に、独特の洒脱がある。小説はこういうおもしろさを表現できるのかともあらためて認識させられる。運命はサイクロイドの軌跡に似ている。その美しい軌跡によって辻褄が合い、楽しい曲線となる、というおおらかな宿命感や諦念が踊っているようで、この受け入れ方の朗らかさに、サイクロイドの曲線の美しさがあらためて浮かび上がってくる。おもしろい発想であり、楽しい新鮮な着想である。最後がやや物足りないが、あえて優秀作としたい。

少ないながら、こちらもまとめると、

**優秀作**

**「村上君と優のこと」若栗清子**「素粒」18号

**「サイクロイド」荻野央**「風の道」16号

**推薦作**

**「愛猫抄」大森盛和**「風の道」16号

準優秀作

「場合」（萌木恵）「素粒」18号



## 読者からのお便り

**■82号感想**

**①亜細亜二千年紀　第一部・第七章**

文学の言葉で表現されたものは、当然だが現実そのものではない。だが第七章で、ウォン・ユアンから語られた言葉は、現実と虚構の境界、その最も極を真率に射ってきた。しだいに重苦しい渦にのまれていく内容はもちろんだが、私は作者の手法に注視したい。慎ましくも母の愛情に育まれていた平穏な家庭が破壊されていく様、一個人の人生に影を落とす様相を淡々と語らせる。影響が及ぶ距離感や粗密さに、逆にリアルが立体的に存在してくる。ここに、歴史を背負う小説本来の姿があると感悟した。

また、簡潔ながらも具体的な描写が写実的印象を強く残した。風土や気候、高床式家屋、大切にしていた機織り機……訪ねたことのない私に、カンボジアの空や風の匂い、日常生活の襞を丁寧に拡げてくれた。

いずれも、五十嵐氏の筆力以外の何ものでもないのだが、もっとも脳裏に刻まれたのは、登場人物それぞれが放つ眼の表情だった。もちろん、作者は全てを描写しない。だが、どのページからもそれを感受することができ、訴えかけてくる。研ぎ澄まされていくユアンの虹彩。お祭りで乗った象の眼の黒さ。母の優しさと怒りや絶望の眼差し。父からは戦闘的かつ先鋭的な眼の光。さらには、ユアンの言葉に耳を傾ける敦志の黙した眼も交錯し、作品に濃淡ある影が揺れあって落としていた。

私にとって第七章は、ストーリー展開よりも作者の筆力が超えてきた。こういった巧みさを提示されると、素人の書き手は憧れずにはいられない。作品に対する作者の表意以外にも、読むという行為の感興はより密度を増していく。壮大なスケールで大きく時代をめぐっていくこの小説を、次号も心待ちにしている。

**②小説稼業事始め**

第1回全国同人雑誌協会総会の模様を、紙面において興味深く見学させていただいた。全国の書き手たちとプロの作家たちの融合は、同人雑誌というステージにおいて、多角度から向けられた真摯な志と情熱がひとすじのベクトルを創出していた。

その流れを汲んだ赤川氏の講演には、プロとして携えるべき意識と気概が点在しており、首肯される言葉と多々出会えたのは幸運だった。氏は、小説というジャンルを主として語られたが、これは随筆、詩歌など他の分野に置換しても活きる言葉と受けとめた。特に、「登場人物を愛しなさい」は心から納得できた。これは、対象とするものに対し深く温かな眼差しを注ぎ自分の内膜でじっくり育むこと――と、私は勝手に理解させてもらった。いずれも心構えとしての享受にほかならない。氏が、謙虚さを失わずプロとしての誇りを持久してきた証がこの紙面に凝縮されていた。

**③百期百会　第二部・朱夏篇**

毎回、この連載を愉しみにしている。理由は幾つかあるが、昭和育ちの私としては描かれる時代背景を、懐かしい匂いとして感覚的に受けとめられることが最たる要因に思う。著名な方々が岳氏を軸に繋がっていく綾は、昭和から平成への時代の流れをも織り込んだ独自の模様を広げてくれる。自己回顧録風だが、出会った人に対する思いを秘めた手紙のようにも感じている。今号では、岳氏が引いた坂上氏のエッセイに書き方の学びがあり、長いこと忘れていた笹倉明という名をふいに甦らせてくれた喜びもあった。

**◇全体を通して**

各賞においての選評を欠かさず熟読している。選考委員の方々の客観的な視点、着目点は気づきの宝庫である。自分の読み方との相違点、盲点が必ず存在する。すべてを受け入れる必須性はないだろうが、他者の見解を融通無碍に受けとめる柔軟性を忘れてはいけないと、思えるのが選評のページの良さでもある。今号は、三部門の賞の他に全国同人雑誌評も加味されており、学びの場が多い印象が強かった。

（北海道札幌市／中村郁恵）